

第一章 商業体系（重商主義）の原理

「富とは貨幣、すなわち金銀である」という通念は、貨幣が取引の流通手段であり、同時に価値の尺度でもあることから生じる。流通手段であるがゆえに、貨幣を持っていれば、ほかのどんな商品よりも必要なものを容易に手に入れられる。肝要なのは金銭を得ることだ。ひとたびそれさえ手に入れば、その後は何を買うにも困らない。価値の尺度であるがゆえに、私たちは他のあらゆる商品の価値を、それと引き換えに得られる貨幣量で見積もる。裕福な人は「資産が多い」とされ、貧しい人は「資産が乏しい」と言われる。儉約家や富を熱望する人は金銭を愛すると言われ、気前のよい人や浪費家は金銭に頓着しないと言われる。裕福になるとは金銭を蓄えることにほかならず、要するに日常語では富と貨幣はほとんど同義と見なされている。

富める国は、富める個人と同様、貨幣が潤沢にある国だとみなされ、一国の内部に金銀（地金）を蓄蔵することが、それを富ませる最も手っ取り早い道だと考えられてきた。アメリカ発見後しばらくの間、スペイン人は未知の海岸に到着すると、まず近隣に金銀が産するかを尋ね、その情報によって、そこに居留地を設けるに値するか、あるいは征

服するに値するかを判断した。フランス王の使節としてジンギス・カンの子のもとを訪れた修道士ブラノ・カルピニによれば、タタール人はしばしばフランス王国に羊や牛が豊富かどうかを問いただしたという。彼らの問いの趣旨はスペイン人と同じで、その地が征服に値するほど豊かな国かどうかを見極めることにあった。一般に貨幣の用法に通じていない牧畜民の社会では、家畜が流通手段であり価値の尺度である。したがって、彼らにとって富は家畜に存し、スペイン人にとっての富が金銀に存したのと同様である。両者を比べれば、タタール人の見方のほうが、おそらく、真実により近かったのかもしれない。

ロツクは、貨幣とほかの動産とを区別すべきだと指摘する。彼によれば、ほかの動産は消耗性がきわめて高く、それから成る富はあまり当てにならない。ある年にはそれらに満ちあふれる国も、輸出が全くなくとも、ただ自国の浪費と奢侈だけで、翌年にはそれを大いに欠くことがある。これに反して貨幣は「頼れる友」であり、手から手へ渡り歩くにせよ、国外に出るのを防ぎ得るなら、容易には浪費も消尽もされがたい。ゆえに金銀は、国家の動産的富のうち最も堅牢にして実質ある部分であり、それゆえそれらの金属を殖やすことこそ、その国の政治経済の大いなる目的であるべきだと彼は考え

た。

これに対し、他の者はつぎのように認める。もし一国が世界から完全に隔絶されていれば、その国内で流通する貨幣の多少は問題とならない。その貨幣によって流通する消費財は、ただ、より多くあるいはより少ない枚数の貨幣と引き換えられるにすぎず、その国の真の豊かさは、ひとえにそれら消費財の豊富・欠乏にかかっている、と。だが、外国と交渉を持ち、海外で戦を交え、遠地に艦隊や軍隊を維持しなければならない国々では、事情は異なると彼らは考える。そうした費用は、金銭を国外に送り払って支弁するほかになく、また、国内に潤沢に金銭を備えていなければ、多額の金銭を国外へ送ることはできない。ゆえに、このような国は、平時のうちに金銀を蓄蔵し、いざというとき対外戦争を遂行する原資に充てられるよう備えておくべきだ、というのである。

これらの通念の帰結として、欧州の諸国は、それぞれの国内に金銀を蓄蔵しようとして、ありとあらゆる手立てを講じてきたが、ほとんど功を奏さなかった。欧州にこれらの金属を供給する主たる鉱山の所有者であるスペインとポルトガルは、金銀の国外持ち出しを最も苛烈な刑罰をもって禁ずるか、さもなくば相当高額の輸出税を課した。同様の禁制は、古くは他の多くの欧州諸国の政策の一部でもあったらしい。最も意外なところに

すらその例は見いだされる。すなわち、スコットランドの古い議会制定法の中には、王国外への金銀搬出を重罰をもって禁ずる条項がある。フランスとイングランドにも、古くは同様の政策が行われていた。

これらの国が商業化すると、商人たちは、この禁止がしばしばきわめて不便であることを痛感した。自国に輸入するためであれ、別の外国へ運ぶためであれ、欲する外国品は、ほかのいかなる貨物で支払うよりも金銀で支払ったほうが有利に買い付けられることが少なくなかったからである。ゆえに彼らは、この禁制は通商に有害だとして異議を唱えた。

彼らは第一に、外国品を購入する目的で金銀を輸出しても、国内におけるそれら金属の保有量が必ずしも減るとは限らない、と論じた。反対に、しばしばそれが増えることすらある。というのも、そのことによって外国品の国内消費が増えないかぎり、それらの品は他国へ再輸出され、そこで大利を得て売却されることで、当初の購入に支出した額をはるかに上回る金銀を呼び戻しうるからである。マン氏は、対外貿易のこの働きを農業の種時と収穫期になぞらえる。「もし私たちが、種時の農民の所作、すなわち良質の穀物を多く土中に投ずるところだけを見るなら、彼を農民というより狂人とみなすだ

ろう。だが、彼の労苦の到達点である收穫期の働きを考えれば、その行為の値打ちと豊かな増収がわかる」と述べている。

第二の主張は、金銀は価値に比して嵩が小さく密輸が容易であり、持ち出し禁止では流出を防げない、という点である。金銀の出入りを左右するのは彼らの言う貿易収支で、輸出超過なら差額は必然的に金銀で支払われ、そのぶん国内の保有量が増える。逆に輸入超過なら、同じ仕方で金銀が支払われ、保有量は減る。この場合に金銀の輸出を禁じても流出は防げず、危険が増すぶんだけ費用を嵩ませるにすぎない。その結果、為替は差額の支払い義務を負う側に、そうでない場合よりいっそう不利に振れる。外国向けの手形を買う商人は、その国へ送金する際の自然な危険・手数・費用に加え、禁制に由来する特別の危険の分まで、手形を売る銀行家に支払わねばならない。しかも、為替が一国に不利であればあるほど、その国の通貨は、差額の支払いを受ける国の通貨に比べて相対的に安くなり、貿易収支はいよいよその国に不利になる。たとえば英蘭間の為替がイングランドに5%不利であれば、オランダで銀百オンスを受け取る手形を買うのに、イングランドでは銀百五オンスを要する。したがって、イングランドの銀百五オンスはオランダでは銀百オンスの価値しか持たず、オランダ産品の購入量もその比で目減りする

る。他方、オランダの銀百オンスはイングランドでは銀百五オンスに相当し、それに見合う英国産品を購うことができる。こうして、オランダに売られる英国産品は為替差の分だけ安くなり、イングランドに売られるオランダ産品はその分だけ高くなる。その結果、イングランドへ流入するオランダ貨はそれだけ減り、オランダへ流出する英貨はそれだけ増える。ゆえに貿易収支はますますイングランド不利となり、対蘭決済のために輸出すべき金銀の残高はいっそう大きくなる、という理屈である。

これらの論拠には、堅実な部分と詭弁的な部分がある。堅実なのは、交易上、金銀の輸出がしばしば国にとって有利となりうること、また、私人にとって輸出に利得があるかぎり、いかなる禁止でもその流出は止められない、という点である。一方、金銀の量を維持・増加することが、他の有用な商品量を維持・増加すること以上に政府の特別の関与を要する、とみなすのは誤りである。交易の自由のもとでは、そのような商品は、そのような関与がなくとも、つねに適切な量が供給されるからだ。さらに、為替が高く（当該国に不利に）なれば、彼らの言う不利な貿易収支が必ず拡大し、より多くの金銀が流出する、とする見立ても、おそらく誤りである。確かに高い為替は、外国で支払うべき金銭を有する商人にとって不利で、銀行家から買う手形の代価を押し上げる。だが、

禁制に起因する危険のために銀行家に余分の費用が生じて、それによって国内から持ち出される金銀が必ず増えるわけではない。この費用は通例、金銀の搬出を密かに手配する国内の支出として吸収され、手形で引き出された正味額を超える流出はまず生じない。加えて、高い為替は、輸出入の差引きをできるだけ相殺して、為替差損の支払いを要する金額を小さくしようと商人に促すのが自然である。さらにまた、高い為替は外国品の価格を引き上げ、その消費を減らすかたちで、一種の課税として作用する。ゆえにそれは、彼らの言う不利な貿易収支や金銀流出を増やすのではなく、かえってそれらを縮小させる方向に働く。

理屈の出来不出来はともあれ、これらの議論は相手の心を十分に動かした。通商に通じた商人が、通商に不案内な議會や諸侯の評議會、貴族や地方紳士に説いたからである。対外貿易が国を富ませることは、商人だけでなく貴族や地方紳士にも経験が示していたが、その仕組みをよく知る者はほとんどいなかった。商人は自分たちの利潤がどう生まれるかは熟知していたが、国全体がどう富むかは本来の関心事ではない。彼らがこの話題を持ち出すのは、対外貿易に関する法の改正を国に求めるときに限られ、その場で対外貿易の効用と、当時の法がそれをいかに妨げているかを説いた。「対外貿易は国に金

銀を呼び込むのに、問題の法律がその流入を妨げている」という説明は、事を裁断する側にとって、この上なくわかりやすく、十分な根拠に見えた。こうして議論は所期の効果を上げた。フランスとイングランドでは、金銀の輸出禁止は自国通貨の硬貨に限定され、外国硬貨や地金の持ち出しは自由とされた。オランダなど一部の国では、この自由は自国硬貨にまで及んだ。政府の関心は、金銀の持ち出しの取り締まりから、金銀増減の唯一の原因とみなされた貿易収支の監視へと移ったが、実りのない気遣いを、さらに複雑で煩わしく、しかも同じく不毛な気遣いへと振り向けただけでもあった。マンの著書『England's Treasure in Foreign Trade (対外貿易こそイングランドの富)』の表題は、イングランドのみならず他の商業国でも政治経済の基本原理と受け取られ、等しい資本で最大の収益と雇用をもたらすはずの国内取引は、対外取引の従属的なものとみなされた。「国内取引は金銀の出入りを伴わない。ゆえにそれ自体によって国は富みにも貧しくにもならない」とされ、その影響は、国内取引の盛衰が間接に対外貿易に及ぼす範囲に限って認められたのである。

自国に鉱山のない国は、ぶどう畑のない国がワインを他国に求めるのと同じく、金銀を海外に求めざるをえない。しかしだからといって、政府の注意を前者にだけ偏らせる

必要はない。ワインを買う力があれば必要量は手に入るのと同じく、金銀も購買力があれば不足することはない。金銀は他の財と同様に一定の価格で買えるし、金銀が諸財の価格を表すと同時に、諸財もまた金銀の対価となる。政府の関与がなくとも、自由な取引が必要なワインを常に確実に供給してくれるのと同じ確かさで、商品流通の決済やその他の用途に見合う限りで、私たちが購入し用いることのできるだけの金銀もまた、常に供給されると信頼してよい。

一国において、人間の産業が購入し、あるいは生産しうる各種の財の数量は、有効需要に応じて自然に定まる。有効需要とは、その財を市場に備え持ち出すまでに必要な地代・賃金・利潤の全額を支払う用意のある人びとの需要をいう。なかでも金銀ほど、この有効需要に容易かつ正確に即して自ら調整される財はない。これらの金属は嵩が小さく価値が大きく、安い土地から高い土地へ、過剰の土地から不足の土地へ、もつとも運びやすいからである。たとえばイングランドで金の追加的な有効需要があれば、リズボンその他どこであれ入手できる場所から郵便船一隻で金五十トン運び込み、それを鑄造すればギニー金貨五百万枚余になる。ところが、同額の価値に見合う穀物を輸入するとなれば、一トン当たり五ギニーとして必要な船腹は百万トン、すなわち千トン船千隻

に及び、イングランドの海軍でも賄いきれない。

もしある国にもたらされる金銀の量がその国の有効需要を上回るなら、政府がどれほど目を光らせても、その輸出は防ぎようがない。スペインやポルトガルの苛烈な法でも金銀を国内に留め置くことはできない。ペルーやブラジルからの継続的な流入がその国々の有効需要を超え、そこでの価格を周辺諸国より低く押し下げるからである。反対に、ある国での量が有効需要に満たず価格が周辺より高くなれば、政府が骨を折らずとも自然に流入し、たとえ輸入を妨げようとしても成功しない。古代スパルタでも、住民に購買力が備わるや、リュクルゴス法が金銀の流入に立てた障壁はことごとく破られた。税関法の苛酷な嚴罰でさえ、英国東インド会社の品よりいくぶん安いというだけで、オランダ東インド会社およびゴーンブルク東インド会社の茶の輸入を食い止めることはできなかった。ところが茶一ポンドは、銀で通常支払われる最高値のひとつである十六シリング分の銀貨の体積の約百倍、同額の金貨の体積の二千倍余も嵩張る。すなわち密輸はその分だけ難しい。それですら防げないのなら、金銀の移動を法で封じることがはおさら不可能である。

金銀が豊富な土地から必要とされる土地へ容易に運べることは、これらの金属の価格

が、他の多くの財のように絶え間なく大きくは変動しない一因である。多くの財は嵩が張っており、市場が過剰や不足に傾いたときでも容易に移動できないからだ。もつとも、金銀の価格が全く変わらないわけではないが、その変化は通例、緩慢で、徐々に、しかも一様に進む。たとえば欧州では、スペイン領西インドからの絶えざる流入のため、今世紀と前世紀を通じて金銀の価値は持続的に、ただし徐々に下落してきたと、（おそらく根拠は乏しいが）見なされている。とはいえ、金銀の価格をにわかに動かし、他のあらゆる財の貨幣価格を一挙に、目に見えて大きく上下させるには、アメリカ大陸の発見が引き起こしたような通商上の大変動を要する。

それでも、購買力のある国で金銀が一時的に不足しても、代替手段はほとんどの財の場合よりも豊富である。製造の原材料が欠ければ産業は止まり、食糧が欠乏すれば人びとは飢える。だが貨幣が足りないときは、不便は多いものの物々交換で代替できる。信用取引で売買し、商人同士が月に一度や年に一度、相互に債権債務を差し引いて清算すれば、不便はさらに小さくなる。よく整備された紙幣制度なら、不便がないばかりか、場合によっては利点さえもたらす。要するに、あらゆる点から見て、政府が一国の貨幣量の維持や増加を監視することほど無用な注意の使い方はない。

とはいえ、「金詰まりだ」という嘆きは後を絶たない。ワインと同様に、買う力も借りる信用もなければ、手もとに貨幣が乏しいのは常である。どちらか一方でも備わっていれば、必要な金銭もワインも不足することは稀だ。この「金詰まり」の訴えは、浪費家に限られない。商業都市とその周辺一帯に広がることがあり、原因はたいてい過剰取引である。分別ある人びとでも、資本に不相応な規模の計画を立てれば、収入に不相応な支出をする浪費家と同様に、資金を捻出する力も借り入れる信用も失いがちだ。計画が実を結ぶ前に元手は尽き、信用もともに失われる。あちこち駆け回って借りようとしても、誰に当たっても「貸す金はない」と言われる。だが、こうした広範な嘆きが、国内で通例流通している金銀貨の枚数が減った証しとは限らない。対価を差し出せないまま貨幣を欲する人が増えているにすぎない場合が多い。商いの利潤が平時より高まる局面では、大小の商人が揃って過剰取引に走る。かれらは必ずしも通常以上の現金を海外へ送るわけではないが、内外で掛けによって例外的に多くの品を買い付け、それを遠隔の市場に送り出し、代金の戻りが支払期より先に届くことに望みを託す。ところが請求のほうが先に来て、手元には現金も、堅固な担保もない。一般に「金詰まり」と呼ばれる嘆きの原因は、金銀そのものの欠乏ではなく、こうした人びとが直面する借り入れ

の困難と、債権者側の回収難にある。

また、富が貨幣、すなわち金銀そのものに存するのではなく、貨幣で購われるものに存し、貨幣の価値も専ら購買のためにある、ということ、ことさら厳めしく立証しようとするのは滑稽に過ぎる。無論、貨幣はつねに国民資本の一部を構成する。だが、それが占める比重は通例小さく、しかも資本の中でも最も利の薄い部分にすぎないことは、すでに示したとおりである。

商人が「貨幣で物を買うほうが、物で貨幣を得るより概してたやすい」と感じるのは、富の本質が商品よりも貨幣にあるからではない。むしろ、貨幣が通商における公認の交換手段であって、万物がそれとの交換には進んで応じるのに対し、貨幣そのものは必ずしも万物と同じ容易さでは手に入りにくいからである。加えて、多くの商品は貨幣より傷みやすく、手元に抱えておくことでしばしばより大きな損失を被りうる。さらに、商品在庫として持っているあいだは、その代金をすでに現金として手中にしているときに比べ、応じ切れない現金の請求にさらされがちである。このうえ、利潤は買うことよりも売ることから直接に生じる。ゆえに商人は、以上の理由から一般に、貨幣を商品に替えるよりも、商品を貨幣に替えることにいつそう気を揉むのが常である。もつとも、

倉庫に商品を山と積みながら、時機を逸して売り抜けずに破綻する商人はある。だが、国という単位が同じ種の事故に見舞われることはない。商人の全資本は、しばしば、貨幣を得るために売りに出すべく用意された傷みややすい商品に置かれている。これに対し、一国の土地と労働の年産のうち、近隣から金銀を購うために回されうる部分は、ごくわずかにすぎない。残りの大半は国内で循環し消費され、海外に送られる余剰でさえ、その多くは他の外国商品の購入に充てられる。したがって、金銀を買う目的で用意した商品と引き換えに金銀が得られなかったとしても、国が破滅することはない。多少の損失や不便はこうむり、貨幣の代替を講ずる措置のいくつかを余儀なくされるかもしれないが、なおその土地と労働の年産はふだんと同じか、ほとんど同じにとどまる。というのも、それを支える消費資本が、ふだんと同じか、ほとんど同じだけ投入されるからである。また、短期的には貨幣が商品と呼ば込みやすいが、長い目で見れば、商品は、貨幣が商品を引きつける以上に、より必然的に貨幣を引き寄せる。商品には貨幣を得る以外にも多くの用途があるが、貨幣には商品を買う以外の用途はない。ゆえに貨幣は必然的に商品を追うが、商品はつねに、また必然的に貨幣を追うわけではない。買う者は、つねに転売を意図するとは限らず、しばしば使用や消費を意図する。他方、売る者は、つ

ねに何かを買い直すことを意図する。前者はそれでしばしば一切の用を済ませるが、後者は自らの仕事の半ばしか終えていない。人が貨幣を欲するのは、それ自体のためではなく、それで購得するもののためである。

「消費財はすぐに尽きるが、金銀は長持ちする。ゆえに流出を止めて蓄えれば、国の実質的富を信じがたいほど増やせる。したがって、かかる長持ちするものを、すぐに尽きるものと取り換える貿易ほど国に不利なものはない」という主張がある。だが、イングランドの金物とフランスのワインの交換が不利だとは、私たちは考えない。金物はきわめて耐久的な商品であり、これまた絶えず輸出しなければ、鍋釜は世にも信じがたいほど積み上がるにちがいない。ところが、こうした器物の数は、どの国でも、それに対する用に応じておのずと限度がある。ふだん消費する料理に必要な分を超えて鍋釜を持つのはばかげており、もし食料の量が増えれば、その増分の一部で鍋釜が買い足され、またそれを作る職人を余分に養うことにも充てられて、鍋釜の数もそれに応じて増えるはずである。同じく、金銀の量も、どの国でも、それら金属に対する用により限られる。用とは、貨幣として商品を通達させること、および銀器として家財の一種を提供することにある。各国の貨幣量は、それで流通させるべき商品の価値によって規定される。も

しその価値が増えれば、その一部が直ちに国外に向かい、どこであれ入手できる所から、それらを循環させるのに要る追加の貨幣を買い付けて戻ってくる。銀器の量は、その種の華美を好む私的な家々の数と富によって定まり、そうした家々の数や富が増せば、その増分の一部は、おそらく、どこであれ入手できる所から、銀器の買い足しに回される。ゆえに、不要な金銀を導入したり、国内に引き留めたりして国の富を増やそうとするのは、各家庭に不要な台所道具を持たせて食卓の充実を図ろうとするのに等しく、不合理である。不要な道具を買う費用が、家庭の食材の量や質を増やすどころか減らしてしまうのと同様に、不要な金銀を買い入れる費用は、各国において、人びとを養い、装い、住まわせ、また維持し雇用する富を、必然的に減らしてしまう。金銀は、貨幣のかたちであれ銀器のかたちであれ、台所道具と同じく、要するに用具であることを忘れてはならない。それらに対する用、すなわち、それらによって流通・管理・用意される消費財を増やせば、金銀の量は確実に増える。しかし、特別の手段で量そのものだけを増やそうとすれば、用は確実に痩せ細り、しまいには量まで減ってしまう。必要量を超えて蓄積されることがあれば、輸送はあまりに容易で、遊休・不稼働に伴う損失はあまりに大きいので、どのような法令によっても、それらが直ちに国外へ送り出されるのを防ぐこ

とはできない。

対外戦争を遂行し、遠隔地で艦隊や軍隊を維持するのに、金銀を積み上げておく必要があるとは必ずしも言えない。艦隊や軍隊を支えるのは金銀ではなく消費財である。自国の国内産業の年産、すなわち土地・労働・消費資本から生ずる年々の収益によって、遠隔の地でそれらの消費財を購入できる国なら、その地で戦を維持できる。

一国が遠隔地の軍の給料や補給を賄う方法は三通りある。第一に、蓄藏してある金銀の一部を海外へ送り、直接の支払いに充てること。第二に、国内の製造業の年産の一部を輸出し、その代金で支払うこと。第三に、穀物など未加工の年産物の一部を輸出し、その代金で賄うことである。

国内で蓄藏と見なしうる金銀は三つに大別される。第一に、日々の取引に用いられる流通貨幣。第二に、私的な家々の銀器。第三に、永年の儉約によって積み上げられ、君主の国庫に納められている金銀である。

この流通貨幣から多くを外へ回せることは稀である。というのも、国内で年々売買される財の価値を円滑に配分するには一定量の貨幣が要り、それ以上は用がないからだ。流通の回路は、自らを満たすのに足る額を必然に引き寄せ、それ以上は受け付けない。

もつとも、対外戦争の場合には、国外で養う人員が増えるぶん、国内で養う人数が減り、国内で流通する財も減るため、それに見合つて必要貨幣量も縮む。その隙を埋めるために、イングランドでは大蔵手形・海軍手形・銀行手形など、何らかの形の臨時の紙貨を大量に発行し、流通中の金銀に代替させて、その分を国外へ回す機会としてきた。とはいえ、これらは費用が嵩み、かつ長期に及ぶ対外戦争を支えるには、心もとない措置にすぎない。

民間の銀器を溶かして貨幣に替える策は、どの場合でも、先の方策にもまして効果の乏しい手段であることが知られている。フランスは前回の戦争の初めにこの手を用いたが、銀器の細工という価値を失う損失を償うほどの利得は得られなかった。

往時には、君主の蓄蔵財ははるかに大きく、しかも持続力のある資金源となった。だが今日では、プロイセン王を別とすれば、蓄財を積み立てることは欧州の諸君主の政策の一部とは見なされていないようである。

この世紀の対外戦争は、歴史に記録されるものの中でもおそらく最も費用がかかったが、その戦費は、流通貨幣の輸出や民間の銀器の溶解、あるいは君主の蓄蔵財に、ほとんど依存していなかった。直近の対仏戦争で英国が支出した総額は九千万ポンド超で、

新規公債七千五百万ポンドに加え、一ポンド当たり二シリングの地租上積みと、償還基金からの年次借入が含まれていた。支出の三分の二を超える額は、独・葡・米・地中海の諸港・東西インドなど、遠隔の地で費やされた。当時のイングランド国王には蓄財はなく、民間で銀器が異例の規模で溶かされたという話も聞かない。国内で流通する金銀は一千八百万ポンドを超えないと見積もられていたが、近年の金貨改鑄以後、その見積りはかなり過少だったと考えられている。そこで、私の見聞のうち最も誇張された計算に従い、金銀合わせて三千万ポンドに達していたと仮定しよう。もし戦費を貨幣によって賄っていたのだとすれば、この仮定に照らしても、六、七年のあいだに国内の貨幣全体が少なくとも二度、国外へ流出してはまた戻ってきたはずだ、という計算になる。そう仮定してよいのなら、政府が貨幣の保全を見張る必要がいかにないかについての、極めて決定的な論拠となろう。というのも、その短期間に、国内の貨幣が丸ごと二度も出入りしたのに、だれもそれに気づきもしなかった、ということになるからである。ところが実際には、この期間のどの時点でも、流通の水路が平時より枯渇して見えたことはなかった。対価を差し出す用意のある人で、金銭に窮した者は少なかった。むしろ戦時を通じて（とりわけ終盤には）対外貿易の利潤が平時よりも高く、それが常にそうであ

るように、英国各地で過剰取引が広がり、それにいつもの「金詰まり」の訴えが続いたにすぎない。資力も信用もない人びとが金を求め、債務者が借りにくいからこそ、債権者も取り立てにくくなったのである。それでも、しかるべき価値を差し出せる者にとつては、金銀は概ねその価値どおりに入手できた。

したがって、直近の戦争の巨費は、金銀の輸出ではなく、主として何らかの英国産品の輸出によって賄われたにちがいない。政府（またはその委託を受けた者）が商人と、ある外国への送金契約を結ぶと、商人は通常、振り出した手形の支払先である外国の相手方への決済を、金銀ではなく商品を送って行なおうとする。当該国で英国商品の需要が乏しければ、第三国へ送り、そこで当該国向けの手形を買い求める。市場にかなう商品の輸送には、つねに相応の利潤が伴うが、金銀の輸送に利潤が付くことはほとんどない。金銀を外国商品の購入に充てる場合でさえ、商人の利益は購入ではなく、戻り貨物の販売から生じる。まして借金の支払いのためだけに金銀を送れば、戻りもなく、したがって利益もない。ゆえに商人は、金銀の輸出ではなく商品の輸出によって対外債務を決済する道を、自然と工夫するのである。実際、『The Present State of the Nation（国家の現状）』の著者は、戦争中、見返りなしで大量の英国商品が輸出されたことを指摘

している。

前述の三種の金銀とは別に、どの大商業国でも、対外取引のために出入りする地金が少なからずある。この地金は、各国の国内通貨がそれぞれの国内で財の流通に応じて動くのと同様に、諸国間を循環するから、「大商業共和国」の通貨と見なせる。各国の通貨は、その国の内部で流通する商品によって動き方が定まり、大商業共和国の通貨は、国と国とのあいだで流通する商品によって動き方が定まる。いずれも交換を円滑にするために用いられる点では同じで、前者は同一国内の人びと相互の交換に、後者は国をまたぐ人びとの交換に役立つ。この大商業共和国の通貨の一部は、実際、近時の戦争の遂行にも用いられていたであろう。大戦の際には、平時とは異なる動き方がそこに与えられ、戦場周辺に多く巡り、各軍の給金や糧秣の購入に、そこで、または近隣諸国で、より多く投じられると考えるのが自然である。とはいえ、英国が毎年その一部をこのように用いたのだとしても、その分は毎年、結局は英国産品か、英国産品で得た何かで買い求められたはずである。つまるところ、戦争を続ける力の源泉は、土地と労働の年々の産出、すなわち商品に行き着く。巨額の年次支出は大きな年産でしか賄いようがない。たとえば一七六一年の歳出は一千九百万ポンド余に達した。いかなる蓄蔵も、まして金

銀の年産ですら、これほどの恒常的浪費を支えられはしない。最善の記録によれば、スペインとポルトガルに年間にもたらされる金銀は、通例では六百万ポンド余を大きくは上回らず、年によつては当時の戦費の四か月分を賄うのもやつとであつた。

遠隔地で軍の給金や糧秣を調達し、またはそれに充てるべき大商業共和国の通貨の一部を得るのに最も適するのは、体積が小さく価値が大きく、したがつて僅かな費用で遠方に輸出できる、精巧で高度に仕上げられた製造品である。そうした製造品の年々の余剰を豊富に生み、平時から諸外国へ輸出している国なら、相当量の金銀を輸出しなくても、いや輸出すべき金銀をほとんど持たなくても、長年にわたる多額の対外戦争を続け得る。この場合、製造業の年々の余剰の相当部分は、国内に見返り貨物を戻さずに輸出される（商人にとっては戻りがあるにせよ）。政府が商人から外国向け手形を買い取り、それで現地の軍の給金や糧秣を支払うからである。とはいえ、この余剰の一部はなお従前どおり見返りを伴つて戻る。戦時の製造業には二重の需要がかかる。第一に、軍の給金・糧秣の支払いに充てるべく海外へ送る商品の生産。第二に、平素から国内で消費されてきた通常の輸入品の代金を賄うための輸出用の生産である。ゆえに、もっとも苛烈な対外戦争のさなかでも、多くの製造業部門はしばしば大いに繁栄し、反対に、講和の

到来とともに衰え始めることがある。国が荒廃するさなかに栄え、国が繁栄を取り戻すにつれて陰り始めることもある。前戦争期から講和後しばらくのあいだに見られた英国の各種製造業の消長は、その一例である。

高費用で長期に及ぶ対外戦争を、土地の未加工の産物の輸出で賄うのは現実的ではない。軍の給料や糧秣を賄える量を遠地へ運ぶには輸送費が過大になりがちで、そもそも多くの国は自国民の生計に足る分をわずかに上回る程度しか産しない。ゆえに大量に送り出せば、人びとの必要な糧を外へ出すに等しい。他方、製造品の輸出は事情が異なる。それに従事する人びとの維持は国内に残り、外へ出るのは仕事の余剰分だけである。ヒュームがしばしば指摘するように、古い時代のイングランド王が中断なく長期の対外戦争を遂行できなかったのは、貨幣が不足したからではなく、輸送採算に適う精緻な製造品が乏しかったからである。当時も売買は今と同じく貨幣で行われており、流通貨幣量は、その時代に通常行われていた売買の件数と価額に見合った比率を保っていたはずで、むしろ紙幣が存在しなかった分だけ現在より大きかったはずである。商業と製造が未発達な国では、主権者は非常時に臣民から多額の臨時拠出を得にくい。そのため、非常時に備える唯一の資金源として宝を蓄えようとするのが通例である。この必要と無関係に

しても、そうした境遇では蓄積に要る儉約に自然と傾く。世の中が単純であったころ、君主の支出は、宮廷のけばけばしい虚飾ではなく、小作人への施しや従者への饗応に向けられた。施しと饗応は、虚栄と違って、度を越すことがまれである。ゆえに、タタールの首長は誰もが財宝を持ち、ウクライナのコサック長マゼーパ（カール十二世の名高い同盟者）の宝は巨額であったと伝えられる。メロヴィング朝のフランス王たちも皆、宝を有し、王国を子に分けるとときには宝も分けた。サクソンの諸侯や征服王朝初期の王たちも、同様に財宝を積んだ。新王の「第一の事業」は、しばしば先王の宝を押収することと継承を確かなものにするのであった。これに対し、商業が発達した国の君主は、非常時には臣民から臨時の賦課を引き出せるため、宝を積み上げる必要に迫られないし、その気にもなりにくい。時代の風に、いやおうなく従い、領内の大地主と同じ虚飾に支出が規定されるからである。宮廷の取るに足らぬ虚儀は日ごとに華麗さを増し、その費えは蓄積を妨げるばかりか、しばしばもつと必要な支出に充てるべき財源をも食い潰す。スバルタの将デルキュリダスがペルシア宮廷を評して「光彩は多いが力は乏しく、召使いは多いが兵は少ない」と言ったことは、幾人かの欧州の君主にもそのまま当てはまる。

金銀の輸入は、対外貿易から国が得る主要な利益ではないし、まして唯一の利益でもない。対外貿易がどの土地の間で行われようとも、そこに関わるすべての側に二つの明確な効用をもたらす。自国の土地と労働の産出のうち国内では需要のない余剰を外へ出し、その代わりに需要のある別の品をもたらすこと。すなわち、余剰を他の品と取り換えることでそれに価値を与え、欲求の一部を満たし、享樂を増すことである。これにより、国内市場の狭さが、特定の技艺や製造における分業の徹底を妨げない。国内消費を超える産出により広い市場を開くことで、生産性の改良と年産の極大化が促され、ひいては社会の実収入と富が増す。対外貿易は、こうした大きく重要な役割を、つねに、それが行われるあらゆる国々に対して果たしている。関わる国々は皆、大きな利益を得るが、商人の居住国が最大の利益を得がちなのは、彼らが主として自国の不足を補い、余剰を捌くことに携わるからである。鉾山を持たない国へ必要な金銀を運ぶことも、確かに対外貿易の仕事の一部だが、その比重はきわめて小さい。それだけを目的として対外貿易を営む国があるとすれば、百年に一度船を仕立てれば足りるほどであろう。

欧州が新大陸の発見によって富んだ主要因は、金銀の流入ではない。アメリカの鉾山の豊富さが両金属を値下がりさせ、銀器一式は、一五世紀にはいままら要する穀物や労

働のおよそ三倍を要したが、今日はその三分の一で手に入る。同じ年間支出で買える銀器の量は約三倍に増え、価格が三分の一になれば、従来の購入者は三倍買えるばかりか、購買層自体も十倍、二十倍にまで広がる。ゆえに、仮にアメリカの鉱山が発見されていなかったとしても、今日の欧州の銀器保有量は、その場合に比べて三倍どころか二十倍、三十倍に達しているかもしれない。ここまでは、確かに現実的な便益だが、ごく些細なものにすぎない。金銀の値下がりには、それらを貨幣として用いるうえではむしろ不便を増す。同じ買い物をするのに、かつてはグロート（四ペンス）一枚で済んだところが、今ではシリング（十二ペンス）を持ち歩かなければならないからだ。どちらの影響がより取るに足らないかは措くとしても、欧州の姿を大きく変えるほどのことではない。他方で、新大陸の発見は、欧州産品に新しくほとんど尽きることのない市場を開き、旧来の狭い商圈では需要不足のために不可能だった分業の進展と技術の改良を促した。欧州のあらゆる国で労働の生産性が高まり、その産出が増え、それに伴って住民の実収入と富も増した。欧州の品の多くはアメリカにとって未知であり、アメリカの品の多くも欧州にとって未知であったため、これまで考えられもしなかった新たな交換が始まり、それは旧大陸にとって確かに有利であったのと同様、本来なら新大陸にとっても有利であ

るはずだった。ところが、欧州人の野蛮な不正によって、本来は万人に益すべき出来事が、いくつもの不幸な国々に破滅と破壊をもたらした。

ほぼ同時期の喜望峰回りの東インド航路の発見は、距離の長さにもかかわらず、対外交易の射程という点ではアメリカ以上に広大な舞台を開いた可能性がある。アメリカには「野蛮」を超える国が二つあるばかりで、それらは発見とほとんど同時に滅び、他は皆「野蛮」と見なされた。他方、中国・インドスタン・日本など東方の諸帝国は、金銀鉱の豊かさは別として、耕地の開発度や諸技芸・製造の水準において、スペイン人の誇張された古代記述を差し引いても、メキシコやペルーよりはるかに富み、耕され、進歩していた。一般に、富み文明化した国同士の交易は、「野蛮人」との交換よりはるかに大きな価値を生む。にもかかわらず、これまで欧州が東インド貿易から得た便益がアメリカ貿易に及ばなかったのは、およそ一世紀にわたるポルトガルの独占に始まり、十七世紀初頭にオランダがそれを侵食して東インド会社に専売を集中し、英・仏・スウェーデン・デンマークもこれに倣って独占会社を設け、欧州のいかなる大国も東インドとの自由貿易の恩恵を受けられなかったからである。ほぼすべての欧州諸国で自国民に開かれていた、自国と植民地のあいだのアメリカ貿易とは対照的であった。東インド会社

は特権と巨富、そして各政府の厚い保護を受けたことで強い嫉視を買い、「毎年多量の銀を流出させるから有害だ」と非難された。これに対し当事者は、「銀の継続的輸出は欧州全体を貧しくするかもしれないが、自国を貧しくはしない。戻り貨物の一部を他の欧州諸国へ再輸出することで、持ち出した以上の銀を毎年持ち帰っている」と反論した。反対・反論いずれも、先に論じた「富＝金銀」という通念に立つ議論であり、これ以上論じるまでもない。銀の東送が続くことで、欧州では銀器がいくらか高くなり、銀貨は労働と諸商品をいくらか多く購えるようになっていよう。前者はごく小さな損失、後者はごく小さな利得にすぎず、公的な関心を割くほどのものではない。東インド貿易の本義は、欧州産品、あるいはそれで購われる金銀の市場を開き、欧州の年産を増やし、その結果として欧州の実質的な富と歳入を増やすところにある。これまでその効果が小さかったのは、各所で課されてきた制限と独占が重い足かせとなってきたからにほかならない。

くどくなるのを承知で、「富＝貨幣（すなわち金銀）」という通念を徹底して検討することにした。日常語で「貨幣」がしばしば「富」を意味し、この語義の曖昧さが通俗観を身につけた思い込みへと変えてしまった結果、その不合理を承知している者でさ

え、議論の途上で自らの原則を忘れ、自明の真理であるかのように前提にしてしまいがちである。通商論の名手とされる英国の著者のなかにも、「国富は金銀だけでなく土地・家屋・各種の消費財にある」と書き起こしながら、論を進めるうちにそれらが記憶から滑り落ち、結局は一切の富を金銀に還元し、金銀の増殖を国家の産業と通商の最大の目的に据えてしまう例が少なくない。

「富は金銀に存する」、「鉦山なき国が金銀を得る道は貿易差額、すなわち輸出超過のみ」という二つの原理が確立すると、政治経済の目標は必然的に、自国消費向けの外国品の輸入をできるだけ抑え、国内産業の産出物の輸出をできるだけ増やすことへと収斂した。要するに、国富を増すための二本柱は、輸入制限と輸出奨励である。

輸入規制は二つに大別される。

第一に、国内でも生産可能な外国産品については、どの国からのものであれ国内消費向けの輸入を制限する。

第二に、貿易収支が不利と見なされた特定の国からの輸入を、ほとんどすべての品目について抑制する。

こうした諸制限は、ときには高率の関税、ときには全面禁輸というかたちを取った。

輸出は、関税還付や輸出奨励金、外国との有利な通商条約、さらには海外における植民地の設置によって後押しされた。

関税還付は二通りに与えられた。第一に、内国製造品に物品税などの内国税が課されている場合、輸出の際にその全部または一部が還付された。第二に、関税の課税対象となる外国貨物を再輸出する目的で輸入した場合、再輸出の際に当該輸入関税の全部または一部が還付された。

奨励金は、創設間もない製造業を助成するため、または特段の保護に値すると見なされた他の種類の産業を奨励するために支給された。

有利な通商条約によって、特定の外国において、自国の商人と商品に対し、他国に与えられている以上の特権を取り付けた。

さらに、遠隔の地に植民地を設けることにより、単なる特権にとどまらず、本国の商人と商品に独占特権が与えられることもしばしばあった。

先に挙げた輸入抑制の二類型に、これら四つの輸出奨励策を加えた六つが、貿易収支を自国に有利に傾けて国内の金銀を増やそうとする商業体系の主要な手段をなす。以下、これらを章を分けて取り上げ、貨幣流入の作用にはあまり立ち入らず、主として各策が

国内産業の年々の産出に及ぼす影響を検討する。その年産の価値を増す方向に働くなら国の実質的な富と歳入が増え、減ずる方向に働くならそれらが減ることは明らかである。